巻頭言

檀原久由

2017年11月に開かれた第15回全国研究会議では、「3つの『のみ』の再発見」というテーマが掲げられ、宗教改革の基本原理について研鑽する機会を得た。基調講演に立った内田和彦氏は、聖書の説き明かしの復興、すなわち、説教の力強い復活と信仰義認を支える「信仰のみ」「恵みのみ」の原則の徹底こそが、今日の日本の教会に必要とされることと説いた。講演のパネラーの一人であった藤本満氏は、宗教改革を土台とした運動体として福音主義を捉え、日本では「聖書信仰」という言葉が歴史的に中心的な役割を演じてきたと指摘した。

これまで、福音主義を標榜する教会は、積極的に聖書に親しみ、説教に耳を傾け、聖書の教えを規範として生き、伝道するようにと勧めてきたはずである。ところが、信徒が聖書を読まなくなった、祈らなくなった、伝道しなくなったという声は、福音主義の教会の中で耳にするようになって久しい。我々は、キリスト者が聖書に親しみ、ディボーションや礼拝を重んじる信仰生活が当たり前という認識が通用しない時代にあると考えた方がよいだろう。あるいは、情報充満の時代にあって、世間の情報に翻弄され、聖書に対する関心と信頼が薄れていると捉えた方がよいのかもしれない。

その理由は色々あると思うが、インターネット環境の利用や拡大、少子高齢化など、我々を取り巻く社会環境の急速な変化に影響された、ライフスタイルや価値観の変化による世界観・人生観の多様性が挙げられる。

このような状況の中、活字離れが起きているといわれているが、出版社の統計によると、スピリチュアルな内容を扱う一般書物への関心は高く、発行数は上昇しているという。その中にはキリスト教的なものもある。

スピリチュアルという言葉の理解や見解に関して、異なる神学立場を持つ会

員の間では違いが当然出ることだろう。しかし、ルターが真摯に聖書に向き合い、実存的に聖書と関わりを持ち続け、「神の義」の理解を改めたという「塔の経験」は、スピリチュアルな経験と表現できるだろう。プロテスタント信仰の歴史が浅く、多くのキリスト教会名や教団名が存在する日本において、スピリチュアルなものを求める日本人には、何が本当のキリスト教信仰なのか判断できず、キリスト教とは思えないような異端の主張に耳を傾けてしまうのも無理はない。

そこで、我々がこの時代の社会と人々に貢献できることは、我々がルターのように聖書を自分の手の内に取り戻し、聖書信仰の意義に確信を置いて、聖書から福音の命と真理を説き明かすことではないだろうか。プロテスタント神学の起点となったルターの改革と神学を学び直すことは、この時代の人々の関心事とニーズに寄り添うことを可能にさせるし、現代の宣教の出発点となるといえるだろう。

私は、プロテスタントの神学的基本と起点をしっかり押さえて 、宗教改革者の義認の理解を深めることから新たな神学研究の息吹が起こり、結局は、福音の豊かさに触れる機会を増やして、宣教の挑戦的な視野の回復に貢献できると信じる。多数の神々の存在（神学）を認める国において、汎神論的・アニミズム的な信仰に慣れ親しんでいる同胞が、聖書も単なる一つの真理を提供する古典書・宗教書と見なさないためにも、キリスト教の負の歴史と聖書の信仰とが混同されないためにも、聖書の権威の確認と聖書の解き明かしは、今だからこそ重要になると考える。

今号のテーマは「福音の理解―義認をめぐって―」である。この特集の一つのねらいは、義認に関する所謂 NPP の立場を建設的に批評することである。信仰義認をめぐる理解を深めることは懐古的になることではない。福音主義の教会に生きる我々は、この時代から信仰のチャレンジを受けていると考えるべきであり、自らの宗教意識の変革が求められていると自覚するべきである。もし、キリスト者の自我形成がこの時代と関係を持ちながら、聖書と教会と聖霊の助けを通してなされると考えるならば、我々自身が神の言葉に真摯に捕らわ

れなければ、いったい誰が福音に確信を置くことができるだろうか。

その意味で、福音主義に生きる恵みと意義をこの特集号から読み起こそうではありませんか。あふれる情報が行き交う社会に置かれ、何が真理か分からなくなっている人々に向かって、神の言葉に信頼と確信を見出せなくなっているキリスト者に対して、聖書の中にあふれている真の神の命、真実、愛、赦し、慰め、平安などを、自信をもって届けようではありませんか。

安黒氏の「福音主義義認論」は、今日の神学会が深く関心を示すテーマを取り上げ、従来の義認論と NPP の立場に立つ N.T. ライトの義認論とを比較・分析し、評価を下している。この論文は福音主義教会が前提としてきた、ルターの義認論を見つめ直す機会を我々に与え、読者自身が信仰の立ち位置を判断したり、確認したりするための良い示唆を提供している。

内田氏の論文の中で、伝統や教会の権威を全面的に否定するのではなく、キリスト教の歴史の中における連続性に注目し、「聖書のみ」の観点から、教会諸伝統を相対化させつつも、真理契機を継承し、「聖書のみ」の実質を強化する為の原語研究、釈義研究の充実化やカテキズム教育を重視すべき、との指摘は興味深い。また、認罪の意識の乏しい日本において、「信仰義認」の教理は罪の認識を前提としていることを忘れてはならない。聖書の解釈者としての信仰者が絶対的な権威と能力を振るおうとする誘惑に対して、ブレーキとなるのが信仰義認の教理であるという指摘はもっともであり、我々自身が日々に改革される者であることを覚えたい。

小宮山氏が、「なぜ今、義認なのか」という言葉から論文を書き出したところに、ルター派教会の NPP に関する対応が読み取れる。義認論はルター派教会の神学の土台であって議論する余地がないからである。しかし、ローマ・カトリック教会との間で調印された「義認の教理に関する共同宣言」に関する解説は、我々にこの時代の文脈にそって解釈されるべき内容であることを示唆する。義認論の多方面からの注意深い考察は、新たな聖書解釈への関心の扉を開くチャンスとなり得ることだろう。

水草氏は「義認と贖いの関係」を、ギリシャ教父、ラテン教父、自由主義神学の立場を概観しながら論じ、宗教改革者たちの理解との関連性を述べている。ルターもカルヴァンも決して西方教会の神学だけに固執したのではなく、東方教会の理解にも関心を向けたのであるから、「あれも、これも」、相互補完的な関係が明らかにされたことは意義深い。我々の神学会が決して排他的ではなく、色々な神学の立場を異にする会員が発言し、建設的な議論の場を持っていることはとても健全であるといえる。今の神学会の関心の潮流にある、サンダースやライトの義認の理解が精査されたこともその一つであろう。

今号に寄稿されたすべての方々とその労苦に感謝を捧げたい。そして、あれやこれや、頭と身体、理論と実践とが手を取り合いながら、さあ、教会の場へ、宣教の場へ、踏み出そうではありませんか。

（前編集委員）